

『モード年譜』 *Almanach des modes 1814~1822*

講師（西洋服装史担当） 斎藤多香子

服飾史や生活史の資料は無限にあり、ひとつひとつの資料の価値付けは、研究方向によっておのづと定まってくるものである。今回紹介するアルマナック——小冊子体の暦——は、なかなか日本では今まで手に取ることが出来なかったため、これほど豊かな史料価値を持つことに、私は迂闊にも気付かずにいた。アルマナックとは、一年間の暦に、気の利いたエッセイ風の小文を綴じこんで小冊子としたもので、年末年始に売り出されたものである。農作業には欠かせぬものであったから、起源は相当古いはずだが明らかにはされていない。しかし、16世紀以降には、大分出回ったらしく、フランクリンの『リチャードおじさんの暦』（1732）や、フランスでは『詩神年譜』（1764~1833）などはよく知られている。当館所蔵の『モード年譜』（K383.135A1~9）*Almanach des modes, chez Rosa, Paris, 1814~1822*.（Colas 97, Lip. 4526）は、服飾版画を各巻数葉ずつ含む貴婦人むけの暦で、9年分9冊が揃っており、保存状態も良く、極めて貴重な文献である。版画のスタイルは、『ジュルナル・デ・ダーム・エ・デ・モード』と酷似しており、またこの暦の中で、同誌の宣伝をしていることから考えても、版元の性格は推し量られる。各冊子とも手のひらにすっぽり入ってしまうくらいの大きさで、各冊色違いの美しい絹モワレで装幀され、金紋様が刻まれた宝石のような小本である。暦の部分は、僅か数頁だが、グレゴリアン暦を中心に、ロシア暦、プロテスタント暦を加えたものもある。月の満干や日食、月食、祭日、また四季の始まりの日付とその時刻まで記されている。当然と言ってしまうえばそれまでだが、ヨーロッパの春は暦の上でも3月下旬まで待たねばな

らない。1月を新春などとは呼ばないのである。

さて、冊子の大部分は、モードに関わる小文で占められている。例えば、1814年版を覗いてみると、四季折々に似つかわしい服飾、サロン評や文藝時評、演劇評、女性のお洒落に欠かせぬものとして、服飾付属品雑貨店、頭飾品店、ローブ仕立て屋、コルセット屋、絹地屋、刺繍屋、下着屋、毛皮屋、メリヤス物を扱う店、靴屋が取り上げられている。さらに、男性の身嗜みについては、帽子屋、理髪店、テイラード仕立て屋、生地屋、キュロット屋、半靴下屋、靴屋、ブーツ屋などが記され、当時のパリに富裕な人々の生活が一語一語から伝わってくるようだ。パリにあるこれらの代表的な店の住所の一覧表も載せられている。また、異国風俗を扱った章もあり、各冊一か国ずつ、中国、英国、スコットランド、インド、スペイン、シシリア、ポルトガル、ロシア、ギリシャがプレート入りで説明されている。つまり、この冊子はお洒落のためのガイドブックとしての役割を担っていたのである。

ところで、四季折々の服飾を論じた章は、私たちになかなか理解できないヨーロッパの四季感情を捉えるための大切な史料となっており、冬に始まり秋に終わる一年の服飾生活にも、各季節ごとに微妙な差異があることが読みとれる。

冬は、四季の中でも最も華やかな季節で、舞踏会、コンサート、観劇、晩餐会と社交に忙しく、それぞれにふさわしい服が必要とされる。1814年版を少し読んでみよう。「……メリノ地は、次から次へと、ローブ、スパンサー（短い丈の上衣）、バルドゥスウ（外套）に裁断され、厳しい冬の寒さから貴婦人の繊細な四肢を守る。男たちはといえ

ば、5枚の襟のついたカリク（外衣）を着たり、さらに新しい流行の裾を引きずるばかりのルダンゴト（乗馬用外衣）を着る者もいる。……趣味の良い者は、こんなものは着ないが。とても短い丈のブルーの上着、明るい色のカシミアのスボン、そして黒いブーツが外套の下には、のぞかなければならない。運河に（スケートでも見に）遊びに行くときには、全く違う服を着なければならない。ドルマン（肋骨飾りのある軍服）と赤いトゥク帽、空色のスボン、それにアストラカンの毛皮つきの編上げブーツが絶対必要である。……」

春はネグリジェ（室内着）が似つかわしい季節。頭飾も微妙に変化する。冬のざっくりとしたナポリ地やヴィロード地のトゥク帽、レヴァンティヌ絹地の帽子から、花で飾ったイタリア麦藁やチュール地の帽子の季節となる。「アカシア、サンザシ、

ヤグルマギク、スイカズラ、ヒナゲシ、ニオイアラセイトウ、アイリス、ヒヤシンス、水仙、リラ、白百合、ナデシコ、ケシ、三色堇、スイトピー、モクセイソウ、薔薇」などの花々が服飾を飾る。

夏は、「昨年は中国モードが流行したが、今年はどうなることだろう。若者たちは、とてもシンプルなものを好んでいた。銀灰色の上着に南京木綿のスボン、白ビケのジレカ太縞のジレといったところ。」

冷たい風がすべてを凍えさせる秋が来ると、薄物はしまわれて、「外套は丈長に、ローブはプロケード織りの絹サテン地」で仕立てられるようになる。

1814年版を要約すると以上のような四季それぞれの衣生活が浮かび上がってくる。だが、さらに詳しくは、どうか本書を繙いて頂きたい。



1814年版「冬」の章のプレート
厚地で丈長の外套、暖かそうな帽子をかぶっている。



1814年版「春」の章のプレート
花飾りを惜し気なく添えた帽子、外套も見当たらない。